

敦煌莫高窟における初唐の弥勒経変相図をめぐる問題

折山 桂子（京都大学）

弥勒経変相図は、現在弥勒菩薩が住する兜率天、未来に弥勒仏が説法を行う閻浮提、またはその双方のありさまを描く変相図で、敦煌莫高窟においては隋から宋に至るまで多くの作例が現存する。時代の推移とともに弥勒経変相図の表現も変遷するが、とりわけ隋から初唐にかけては複数の点で大きな変化を遂げる。中でも注目すべきは、隋には兜率天の场景のみが描かれていたが、初唐には閻浮提における弥勒仏説法の場面も付加されるようになる点である。この主題の変化は弥勒に関する思想の大きな転換を示唆すると考えられるが、当該変化の具体的時期や契機についての詳細な検討は未だ十分になされていない。

そこで本発表では、初唐に弥勒経変相図に起きた変化を検討する基礎として、石窟内の装飾文様や変相図中の表現を分析し、変化の最初期の作例、すなわち初唐の中で最も時代の上がる作例、及びその制作時期を明らかにすることを旨とする。そして変化の契機についても私見を提示したい。

初唐の現存最古の作例を明らかにするにあたり、まず、弥勒経変相図が描かれる石窟内の装飾文様及び変相図中の表現を手がかりに、初唐の弥勒経変相図 8 例について編年を行う。具体的には、窟頂の藻井部に焦点を当て、題記により制作年が明らかな窟の藻井部と、弥勒経変相図が描かれる窟のそれとを比較することで、時間的先後関係を明らかにする。藻井部の図版が入手できない作例については、弥勒経変相図中のモチーフや弥勒仏の表現を手がかりに、その制作時期を検討する。以上により、初唐の弥勒経変相図の中で、第 329 窟の作例がその最初期に位置することを明示する。

続いて、第 329 窟の弥勒経変相図の制作時期をより詳細に明らかにすべく、隋から初唐の敦煌と王朝との関係を取り上げる。これは、表現方法等に鑑みるに、弥勒経変相図の変化には中央からの影響が窺われるためである。敦煌を始めとする西方と王朝との交流は、隋及び初唐には概ね盛んであったが、王朝交代期にはその動乱のために往来が妨げられていた。当該点を中心に勘案し、第 329 窟の制作時期として、再度往来が可能となる 640 年代が妥当であることを指摘する。

最後に、初唐に弥勒経変相図に起きた変化の契機について考察するために、当時活躍した高僧のうち、弥勒信仰者として著名な玄奘三蔵にまつわる著述等を読み解き、弥勒に対する信仰内容を再検討する。これにより、弥勒経変相図の変化には、玄奘のような中国の仏教思想をリードした高僧の関与があった可能性を提示したい。

以上のように、莫高窟における初唐の弥勒経変相図に起きた変化について、第 329 窟の同図が初唐の最初期の作例であり、640 年代に制作されたと考えられる点を明らかにするとともに、変化の契機をもたらした高僧の存在を示唆することが本発表の目的である。